

第Ⅳ章 遺構・遺物の検討

i)はじめに

1992年度の長原・瓜破遺跡土地区画整理に伴う発掘調査では、既述したように旧石器時代から江戸時代の遺構や遺物が検出された。ただし、調査範囲が道路予定地内に限られたため、一部の遺構を除いて規模や性格の判明しないものもあった。また、長原遺跡東南地区の92-24・47・62次調査については調査地周辺の家屋の進入路の確保および現代の土取りの影響を受けていたこともあって、十分な調査が実施されなかった。本章では92-10次調査地のNR903(東川辺川)から出土した斧柄について若干の考察をしておきたい。

ii)斧柄と部分名称

斧は身(斧身)と、これを装着する柄(斧柄)とからなり、柄は図108に示したように斧身を装着する頭部と握り部とに分けられる。また、斧柄はまっすぐな棒状の装着部に孔を穿って斧身をはめ込む直柄と、屈曲した装着部に斧身を固定するための斧台を作り出す曲柄がある[奈良国立文化財研究所1993]。以下、本章で用いる斧柄の部分名称はこれに従っておく。

一方、佐原眞氏は斧身の刃部が柄と平行するものを縦斧、直交するものを横斧と呼び分けており、斧身の刃部の形態から分類された両刃縦斧・片刃石斧は一般的に用いられたもので、両刃横斧も数はあるが、片刃縦斧については数が少なく珍しいものと指摘されている。石斧の使用痕についても検討されており、縦斧は主軸に対して斜行の線状痕が見られ、横斧は主軸に対して平行するものの、刃部の両面で差があり、前主面は弱く短い線状痕に、後主面では強く長い線状痕になるという[佐原眞1977・1982]。

iii)NR901出土斧柄と共伴遺物

NR901(東川辺川)では92-10次調査地以外にもう1点斧柄が出土している。W1は長原遺跡東南地区の南方に位置するNG82-41次調査地で検出されたNR901

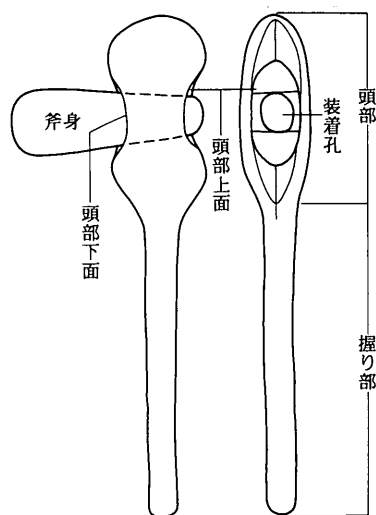


図108 縦斧直柄の各部名称

の流域内に設けられた杭列や落葉広葉樹の枝を用いたシガラミ状の遺構の近くから丸木弓・板材・加工木をはじめ、長原式土器に伴出したものである[大阪市文化財協会1982]、[田中清美・趙哲済1986]。また、W1の出土地点の南側に当るNG88-84次調査地でも流路内から、縦杵が長原式土器や弥生時代前期前半の土器に共伴しており、これらは長原遺跡の標準層序の9Bii~iv層準の水成層あるいはこれらの再堆積層に包含されていることから一括性の高いものと思われる。

W1は頭部が全体にヒビ割れており、その下半部も一部破損しているが、握り部の先端を含めてほぼ原形を留めている。斧柄の全長は58.1cm、頭部の長さ約22.5cmで、斧身の装着孔は頭部の上面側が約4cm、下面側は約7cmある。頭部は側面観が「ひさご形」を呈しており、47とはほぼ同形態といえる(図109)。斧柄に用いられた樹種はコナラ亜属のクヌギまたはコナラで、木取りは握り部に節の跡が残っていることから、1/3~1/4円周の丸木材の分割材を素材にして全体を削り出したものと思われる。

47は第Ⅱ章第2節で述べたように頭部の側面観が「ひさご形」を呈する斧柄で、握り部の下半を焼損しているため、全体の長さは明らかでないが、頭部の大きさから判断してW1と同様なものと考えられる。樹種もコナラ亜属のクヌギまたはコナラで、1/3~1/4円周の丸木の分割材を素材にして全体を削り出している。これらの2点の斧柄はともに斧身を失っているが、頭部や装着孔の形態から判断して佐原分類の縦斧に属するもので、樹木の伐採用の両刃縦斧用の直柄と考えられる。

iv) 縦斧の系譜と時期

次に長原遺跡の斧柄と同様なものについて比較しておきたい。

現在管見によるかぎり、長原遺跡の斧柄と同形態のものは近畿地方以西で未製品を含めて9例あり、このうちの多くが縄文時代晩期終末に属するものである。以下に類例を挙げておく。

近畿地方では滋賀県大津市の滋賀里遺跡で、縄文時代晩期後半に属するものが未製品を含めて3点出土している(図109、W2~W4)。

W2は握り部の下端を欠損しているが、頭部の側面観は「ひさご形」を呈しており、装着孔の大きさは頭部上面が約5.5cm、下面が約8cmで、末広がりの断面になっている。

W3は握り部が付け根の近くから焼損しているが、頭部の側面観は「ひさご形」で、装着孔の大きさもW2と同大である。W2・W3ともに1/3~1/4円周の丸木の分割材を削って作り出されており、樹種はコナラ亜属という[奈良国立文化財研究所1993]。

W4は全長59cmの斧柄の完形品であるが、頭部に装着孔を穿ち、仕上げをする前の段階のものである。頭部の側面観は「ひさご形」を呈しており、形態や大きさも長原遺跡の47・W1に類似している。1/3～1/4円周の分割材から削り出されており、樹種はコナラかクヌギとみられている[田辺昭三・加藤修ほか1973]。

近畿地方以西の斧柄の出土例は佐賀県と福岡県で未製品を含めて5点ある。

佐賀県唐津市の菜畑遺跡では縄文時代晩期後半の山ノ寺式に属する縦斧の直柄が3点(内1点は握り部の一部)出土している(図109：W5、図110：W6)。

W5は握り部の下端部を欠損した斧柄で、頭部はやや扁平な「ひさご形」を呈しており、装着孔は幅4.5cm、厚さ1.9cmある。報告者は「やや小ぶりの蛤刃石斧」の斧柄と考えている。

W6は頭部上端の片側を欠損しているがほぼ全形を留めた斧柄で、頭部の形態は側面観がやや扁平な「ひさご形」を呈しており、全長76cm、装着孔は幅5.8cm、厚さ2.8cmある。握り部の断面形は円形で、下端部はやや太い。報告者は「身幅が長く、やや扁平な蛤刃石斧」の装着を想定されている。以上のほかにも図示していないが断面形が楕円形で、太さ2.5cm×3.5cmの斧柄の握り部の断片が出土している。

これらの斧柄の樹種はいずれもカシで、芯持ち材ではなく、分割材を使用しているとのことである[中島直幸ほか1982]。

福岡県福岡市の雀居遺跡では自然の流路と考えられているSD003から縄文時代晩期終末の夜臼式土器に伴って未製品を含む2点の斧柄が出土している(図110：W7・W8)。

W7は斧柄の未製品で、全長は74.2cmある。頭部のみ削り出しており、握り部の基部は粗割のままで片面には樹皮が残っている。頭部の側面観は「ひさご形」を呈しており、装着孔は穿たれていない。樹種はクヌギである。W8は握り部の中ほどを一部欠損しているが、全長76cm前後に復元されており、頭部の形態は側面観が「ひさご形」を呈している。装着孔は楕円形で、頭部下面の幅が6.7cmあり、上面の幅は一回り小さい。樹種については特に報告されていない[福岡市教育委員会1995]。

以上の2点は形態からみて縦斧の直柄であり、W7はこの種の斧柄の製作過程を知ることのできる希有な資料である。ともに素材は芯持ち材ではなく、分割材を用いている。

以上、近畿地方以西で確認されている長原遺跡の斧柄と同形態の例を挙げた。それらの所属時期は菜畑遺跡および滋賀里遺跡の縄文時代晩期後半の例を筆頭に、縄文時代晩期終末に属するものであることが確認された。一般に縄文時代晩期後半から終末に属する縦斧柄の頭部の形態は側面観が「ひさご形」であるのに対して、弥生時代前期になって新たに登

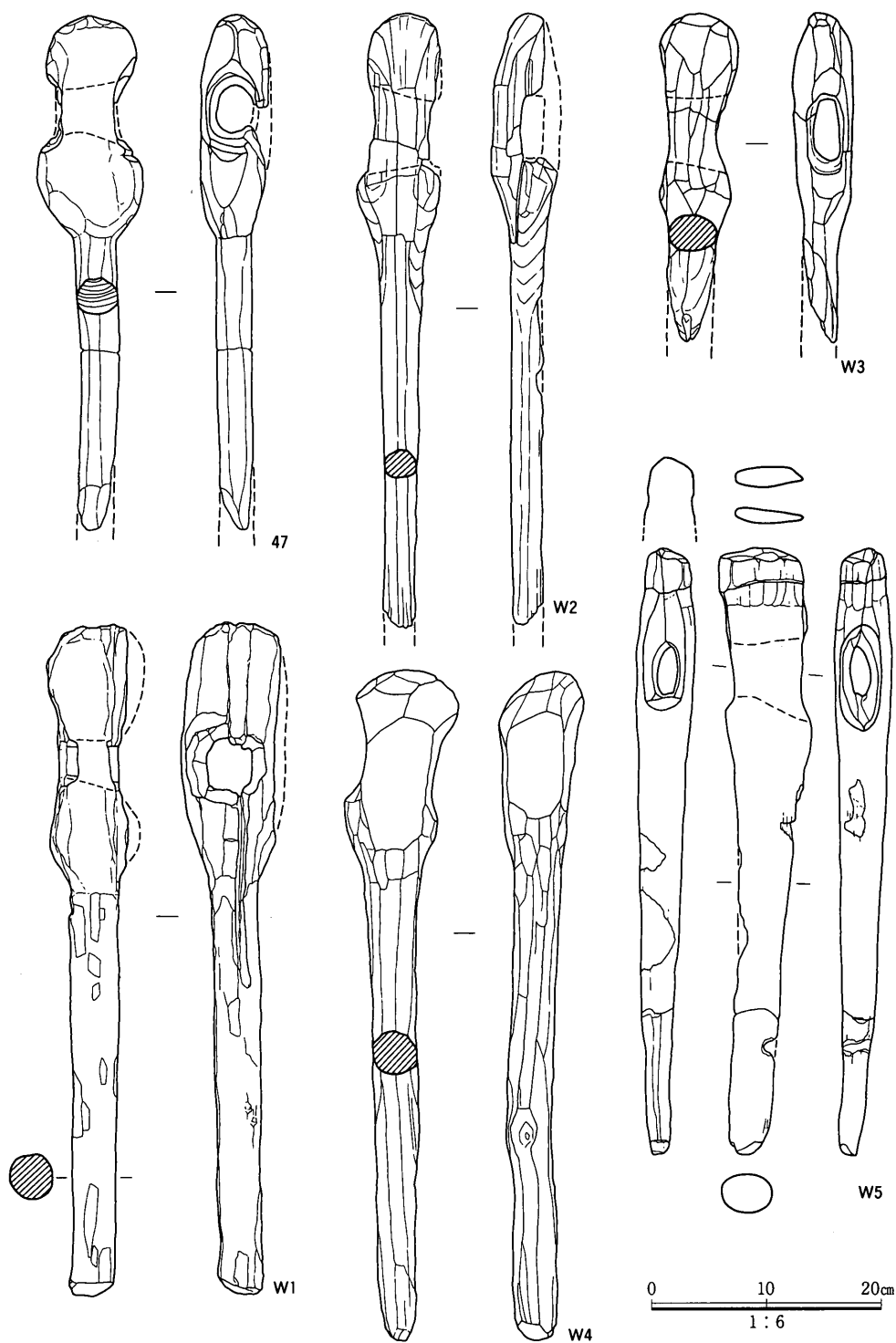


図109 斧柄実測図

47・W1：長原遺跡、W2～W4：滋賀里遺跡、W5：菜畑遺跡

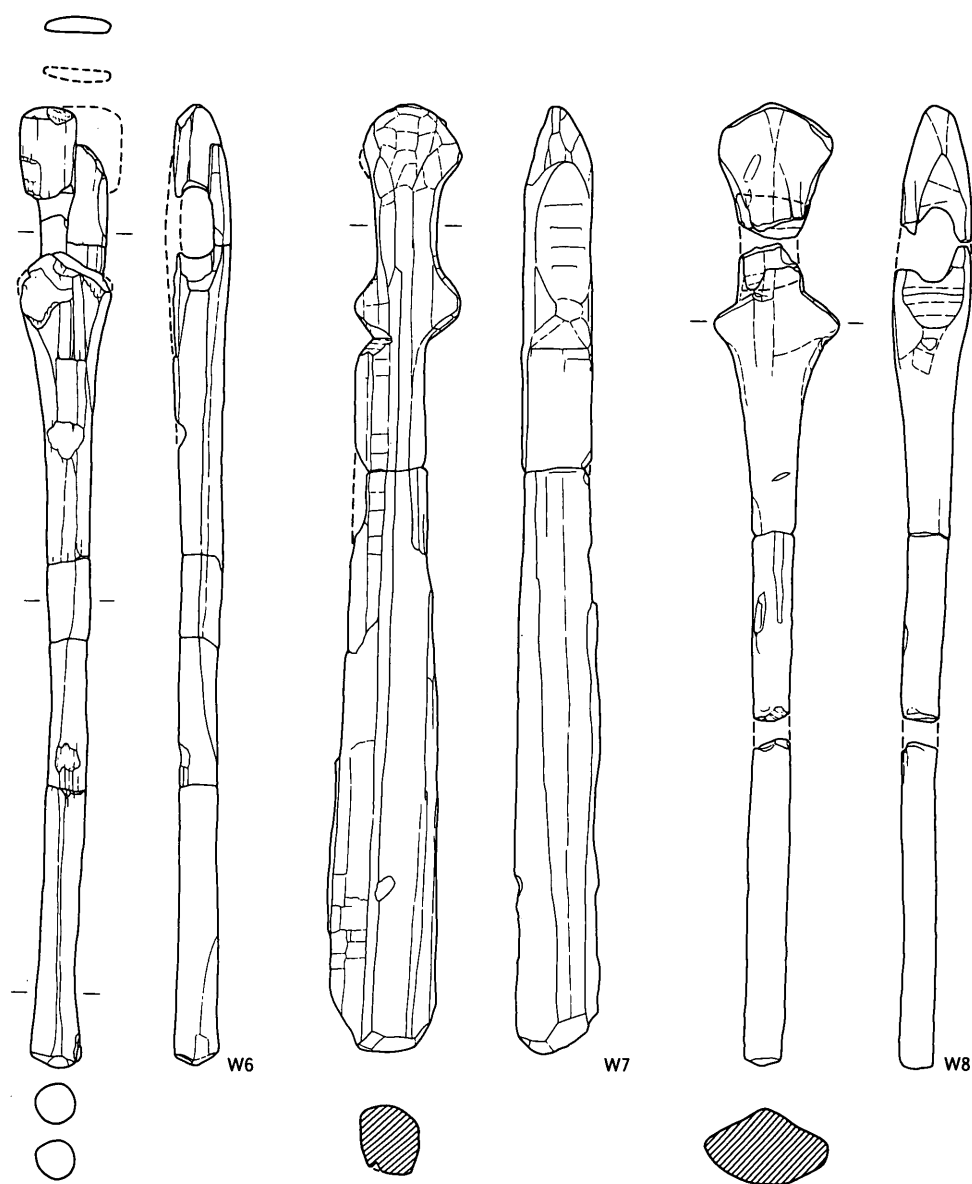


图110 斧柄实测图
W6：莱畑遺跡、W7・W8：雀居遺跡

場する縦斧は頭部の形態が「扇形」に変わるという[佐原眞1985]。また、斧柄の用材も縄文時代晩期後半から終末のものは、一般にクヌギやコナラなどの落葉広葉樹が使用されており、弥生時代前期以降になるとカシ類が多用されるという[金子裕之1984]。たしかに葉畑遺跡の2例を除く斧柄の樹種はコナラやクヌギなどであることから、金子氏が指摘されたように弥生時代以前の縦斧柄の用材には落葉広葉樹が素材として選ばれたものと思われる。しかし、縦斧柄の形態は頭部の側面観が「ひさご形」が一般的といえ、これは用材の樹種を含めて縄文時代晩期後半・終末および弥生時代前期に属する縦斧の直柄を見分ける上で重要な点であろう。

近畿地方では弥生時代前期に属する縦斧の直柄は大阪府安満遺跡(Ⅰ期)・高宮八丁遺跡(Ⅰ期)・鬼虎川遺跡(Ⅰ期新～Ⅱ期)・山賀遺跡(Ⅰ期中段階)・四ツ池遺跡(Ⅰ～Ⅲ期)、京都府鶏冠井遺跡(Ⅰ期中～Ⅱ期)、奈良県唐古遺跡(Ⅰ期)、滋賀県川崎遺跡(Ⅰ期)、三重県納所遺跡(Ⅰ期中段階)などから出土しており、それらの多くは頭部の形態が下端部の左右に張りのある「扇形」を呈するものである[奈良国立文化財研究所1993]。また、斧柄頭部の装着孔の形態は、縄文時代晩期の縦斧の装着孔が隅丸長方形か扁平な楕円形であったのに対して、円あるいは楕円形に近いものが多い。これは、縄文時代晩期の縦斧の斧身には、体部に最大幅のある定角式石斧が、弥生時代前期になって登場する頭部が「扇形」の縦斧の斧身には太型蛤刃石斧が装着されたことを示唆している[早川正一1983]。以上のような縄文時代晩期および弥生時代前期の縦斧直柄の頭部や装着孔の形態的な特徴と長原遺跡の斧柄を比較してみると、以下のような興味深い観察結果が指摘される。

長原遺跡の2点の斧柄は頭部の側面観が「ひさご形」を呈する縦斧直柄に分類されるものであり、型式学的には縄文時代晩期に属するものといえる。樹種についても縄文時代の縦斧直柄に多用されたコナラ亜属であり問題はない。異なる点は装着孔の形態である。長原遺跡の斧柄の装着孔の頭部上面と下面は円形に穿たれており、その大きさも上述した弥生時代前期の縦斧直柄の装着孔とさほど変わらない。これは、長原遺跡の2点の縦斧直柄に装着された斧身は葉畑遺跡で想定されているような身幅が長くやや扁平な蛤刃石斧とは違って、弥生時代前期に登場した両刃石斧に類するものであったことを示唆している。ところで、縄文時代晩期後半・終末の西日本地域に点在する側面観が「ひさご形」の縦斧直柄は、弥生時代前期の「扇形」の縦斧直柄が登場したあとも、頭部の張出しが省略されたものが未製品を含めて大阪府亀井遺跡(Ⅱ～Ⅲ期古)・恩智遺跡(弥生?)・瓜生堂遺跡(Ⅱ～Ⅳ期)などで確認されており[奈良国立文化財研究所1993]、これらは太型蛤刃石斧が伐採斧として

命脈を保つ弥生時代中期後半ごろまで残るものと思われる。

以上のように東川辺川から出土した2点の斧柄について若干の考察を行ったが、このほかにも長原遺跡では東南部地区を中心に縄文時代晩期終末の突帯文土器の最終型式である長原式土器とともに縄文時代の伝統的な祭祀器物である土偶や石棒など、縄文色の濃い遺物が出土している[大阪市文化財協会1982・1983・1992]、[田中清美1992]。その一方で、刳の圧痕のある長原式土器が確認されたり、弥生時代前期前半の遠賀川式土器や土製紡錘車などの遺物も出土している。このような遺物相からみて、当地域の縄文集団は波状的に西方から伝播したであろう弥生文化を受け入れるに際して、従前の縄文色を短期間に払拭しないで徐々に吸収したものと思われる。

弥生文化の定着による生産様式の変化はそれに対応する石器や木器を生みだし、木器製作に使われる工具も変わるとともに従来は利用することの出来なかったカシのような堅緻な材も加工することを可能にしたと考えられている。したがって、菜畑遺跡のカシ材で作られた斧柄は、大陸系磨製石器、木製農具をはじめ、水田址などとともに菜畑遺跡の縄文集団が、近畿地方の同時期の縄文集団よりいち早く新来の大陸文化を受け入れたことを物語っている。また、縄文時代晩期の縦斧直柄の伝統は弥生時代中期後半ごろまで継承されたようであるが、これは縄文の木工技術が基本的には弥生時代に引き継がれたことを示している。

(田中)

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、『長原遺跡(NG82-41)現地説明会資料』
大阪市文化財協会1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
1990、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
1992a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
1992b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ
1997、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ
金子裕之1984、『石の刃の威力』：『縄文から弥生へ』(1984年7月シンポジウム資料) 帝塚山考古学研究所、
pp. 138-146
川西宏幸1978、『円筒埴輪総論』：『考古学雑誌』64-2 日本考古学会、pp. 95-164
佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp. 102-110
佐藤隆1994、『長原・喜連東遺跡の調査－輸入陶磁器を中心に－』：『古代末から中世前期における土器からみた貿易陶磁』 中世土器研究会第13回研究会資料、pp. 14-19
佐原真1977、『石斧論－横斧から縦斧へ－』：『考古論集』－慶祝松崎寿和先生六三歳論文集一、pp. 45-86
佐原真1982、『石斧再論』：『森貞次郎博士古希記念古文化論集』、pp. 161-186
佐原真1985、『石斧』：『弥生文化の研究』5、pp. 37-42
菅榮太郎1995、『石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ、pp. 367-386
鈴木秀典1982、『瓦器碗の編年』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp. 278-284
田島富慈美1993、『有舌尖頭器における剥離面の検討－大阪市内の出土例から－』：『旧石器考古学』47 旧石器文化談話会、pp. 185-193
田中清美1992、『長原遺跡の土偶』：大阪市文化財協会編『葦火』38号、pp. 6-7
田中清美・趙哲済1986、『長原遺跡(川辺3丁目地区)出土の縄文時代の遺構・遺物について』：大阪市文化財協会編『葦火』3号、pp. 4-6
田辺昭三1981、『須恵器大成』 角川書店、p. 185
田辺昭三・加藤修ほか1973、『湖西線関係遺跡調査報告書』 滋賀県教育委員会、pp. 41-42、第46図
趙哲済1995、『長原遺跡の標準層序』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ、pp. 19-34
中島直幸ほか1982、『菜畑』 唐津市教育委員会、pp. 235-240
奈良国立文化財研究所1978、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』、pp. 92-100
奈良国立文化財研究所1993、『斧』：『木器集成図録』近畿原始編(解説)、pp. 11-22
奈良国立文化財研究所1993、『木器集成図録』近畿原始編(図版)、pp. 6-9
早川正一1983、『磨製石斧』：『縄文文化の研究』7、pp. 60-70

福岡市教育委員会1995、『雀居遺跡』3－福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集一、pp. 39－57

南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』8号、pp. 2－4

山中一郎1995、「用語解説」：『旧石器人のアトリエ』羽曳野市遺跡調査会・京都大学文学部考古学研究室
編、pp. 92－95

家根祥多1982、「縄文土器」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp. 142－157